

タイトル	ご退職記念号に寄せて
著者	小松, かおり; KOMATSU, Kaori
引用	北海学園大学学園論集(196): -
発行日	2025-03-27

ご退職記念号に寄せて

人文学部長 小 松 かおり

本学人文学部日本文化学科のテレングト・アイトル先生は、2025年3月31日をもって長く教鞭を執られてきた北海学園大学を定年退職されます。学園論集第196号が退職記念号として発刊されるにあたり、アイトル先生の本学への多大なご貢献に感謝の意を表し、送別の辞を述べさせていただきます。

テレングト・アイトル (Telengut Aikhatar / 艾特) 先生は、1956年に中国のモンゴル自治区、太仆寺 (タイプス) 旗に生まれ、10才の頃に文化大革命による社会変動に巻き込まれました。中学校終了後は、お父さまのアドバイスのもとほぼ独学で文学を学び、文革が落ち着いたのち、23才のときに内モンゴル大学外国語学部日本語文学専攻に入学され、1983年7月に卒業されました。1984年7月には北京語言大学日本文部省日本語講師育成センターを修了、東京外国語大学大学院モンゴル語研究科研究生を経て、1990年3月に大正大学大学院文学研究科日本近代文学専攻博士前期 (修士) 課程を修了、1993年3月に同大学院博士後期課程を単位取得退学され、同年4月東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程に入学し、1998年3月単位取得修了、東京大学博士 (学術) の学位を授与されました。1998年4月に北海学園大学法人嘱託研究員となり、翌1999年4月に同大人文学部日本文化学科助教授に着任、2002年4月に教授、2003年4月に大学院文学研究科教授に就任されました。

先生のご専門は比較文学、日本近代文学です。日本、中国、モンゴル近現代文学・文化における近代化の特殊性と普遍性に対する複眼的な考察と研究、さらに、東西における概念としての文学についての比較的研究等を行ってこられました。その成果は、『三島文学の原型—始原・根茎隠喩・構造』(日本図書センター、2002年)をはじめとする単著4冊、共編著18冊、論文45本、翻訳4点の作品に結実しています。

近刊の単著書には、『詩的狂気の想像力と海の系譜—西洋から東洋へ、その伝播、受容と変容』(現代図書、2016年)や、『超越への親密性—もう一つの日本文学の読み方』(北海学園大学出版会、2023年)があります。後者は、詩的想像力の営為によって現実を象徴的に「超越」する構図を見出した単著であり、比較文学研究者としての先生の集大成となっています。また、日本、中国、モンゴル国の研究者が協力し、モンゴル文学の起源や英雄叙事詩について整理し、解釈を試

みた論文集『モンゴル文学学科史—整理と解釈』（内蒙古文化出版社、2020年）で編著者を務められたことは、余人をもって代えがたいお仕事でした。

教育では、25年の長きにわたってさまざまな科目を担当されました。近年では、人文学部専門科目である人文学基礎演習、人文学演習A・B、比較文学I・II、日本文化専門演習I・II、卒業研究指導等を担当され、大学院文学研究科では比較文学特殊講義I、同演習I A・I B、博士（後期）課程での日本語・思想文化論文指導特殊研究I A・I B・I Cを開講されました。とくに大学院では、修士及び博士（後期）課程の教育と論文指導に注力され、主査・副査として多くの後進の育成にかかわってこられました。

大学運営では、着任以降、入試委員、図書委員、教務委員、『人文論集』・『年報・新人文』編集委員、中国協定校専門委員、市民公開講座委員、教育振興会委員、研究紀要委員、学部広報委員、大学院委員会委員などを歴任されました。中でも長年に渡って人文学部及び文学研究科図書委員として、幅広い教養を背景として、学部・大学院のみならず、全学の図書とデジタル図書の充実に務められたことは、今後の北海学園大学の知的基盤に対する大きな貢献となりました。

学会および社会活動としては、日本比較文学会、国際比較文学会、東京大学比較文学会、日本近代文学会、日本モンゴル文学会に所属され、日本比較文学会では『日本比較文学』編集委員（2013～15年）も務められました。また、ケンブリッジ大学（クレアホールカレッジ）終身会員として国際的な研究にも貢献してこられました。

アイトル先生とゆっくりお話しする機会は日々の雑事にまぎれてなかなか持てなかったのですが、この献辞を書くことを名目に、12月に少しまとめて時間をとっていただきました。わたしは、文革の時代に内モンゴルで育ったアイトル先生が、なぜ文学、それも三島由紀夫という作家に興味をもったのか、また、西欧と東洋の文学の比較という視点に至ったのか、ということに興味がありました。その問いは、授業一コマ分のお話しでは到底解けませんでしたが、いくつか記憶に残ったことがあります。

意外だったのは、三島由紀夫に出会ったのは日本に来てからということでした。通常、三島文学においては、生と死、美と性が注目されていますが、アイトル先生は、三島のその複合的な要素が少年時代に始めて執筆した小説から人間存在の根源として表象されていたこと、三島がそれを root metaphor として捉え、渾身を振り絞って自身を究極までさらけ出し、掘り起こし続け、小説から死まで貫いたことに強く興味を惹かれたとのこと。文学が人間存在の理解に直接的に結びつくというアイトル先生の確信が、「文学者」としてのひとつの視点を体現した在り方としてとても印象的でした。わたし自身は、文学部を卒業しつつ、文学を研究するということがどうにも理解できずにここまで生きてきたためでもあります。最近、他の同僚とも文学研究や文学の教え方について話す機会があり、文学研究の立場も非常に幅広いと認識したところですが、文学作品に人間の根源を探る、という読み方はぜひ腰を据えて試してみたいと思います。

今後もぜひ、わたしたち後進にご指導ご鞭撻いただきますよう、お願い申し上げます。そして、アイトル先生のますますのご活躍を祈念いたします。

テレングト・アイトル先生には、本学における多大な貢献に鑑みて、2025年4月1日付けで、北海学園大学の名誉教授の称号が授与されることを申し添えます。

